

# 琉球大学学術リポジトリ

肢体不自由教育の指導法としてのスヌーズレン教育  
の可能性と今後の展望：  
沖縄県におけるスヌーズレン教育の事例分析を中心  
に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2015-09-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小原, 愛子, 後藤, 彩夏, 韓, 昌完 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/31874">http://hdl.handle.net/20.500.12000/31874</a>

# 肢体不自由教育の指導法としてのスヌーズレン教育の可能性と今後の展望 —沖縄県におけるスヌーズレン教育の事例分析を中心に—

小原 愛子<sup>1)2)</sup> 後藤 彩夏<sup>3)</sup> 韓 昌完<sup>3)\*</sup>

Current situation and issues of the Snoezelen Education : Case Analysis of Snoezelen Education in Okinawa

Aiko KOHARA<sup>1)2)</sup> Ayaka GOTO<sup>3)</sup> Changwan HAN<sup>3)\*</sup>

<sup>1)</sup> 東北大学大学院医学系研究科

<sup>2)</sup> 日本学術振興会特別研究員

<sup>3)</sup> 琉球大学教育学部特別支援教育専修

## ABSTRACT

近年、肢体不自由特別支援学校において、スヌーズレンを授業に取り入れる学校が増加している。しかし、スヌーズレンが教育として明確に位置づけられたのは極めて最近であるため、指導法として体系化されておらず、スヌーズレン教育の実践報告も少ないという現状である。そこで、本研究では、沖縄県の肢体不自由特別支援学校で行われているスヌーズレン教育の実践報告を収集し、スヌーズレン教育の定義と教育課程の位置づけに基づいて整理・分析を行うことで、スヌーズレン教育の現状を把握し、課題を明らかにすることを目的とした。その結果、①注意力向上、②保有する感覚の活用促進、③リラックスや情動の安定、④感情の表出、といったスヌーズレン教育の実践成果や、①スヌーズレンの環境整備、②環境整備のための予算と教室確保、③教材研究の推進、④評価基準・評価方法の確立、といったスヌーズレン教育の課題があることが明らかになった。今後、実践報告の蓄積と分析が、スヌーズレン教育の指導法の体系化につながると考えられる。

## 1. 研究背景

近年、日本の肢体不自由特別支援学校では、スヌーズレンを授業に取り入れる学校が増加している。スヌーズレンとは、1970年代、オランダの知的障害施設で生まれた活動であり、その語源は、オランダ語のスヌッフエレン (Snuffelen、「クンクンにおいを嗅ぐ」という意味) と、ドゥーズレン (Doezelen、「ウトウト居眠りをする」という意味) の2つの言葉からなる造語である (姉崎、

2013)。スヌーズレンは主に、ホワイトルームと呼ばれる部屋を設置し、その中で光、音、におい、振動、温度、触覚等様々な素材を使用することで多重感覚環境をつくり、リラクゼーションを促すことを目的としている活動である。近年では、障害者だけでなく健常者も対象に、レジャー (レジャー) や教育、セラピーといった幅広い領域での活動が展開されている。

諸外国におけるスヌーズレンの研究動向を姉崎 (2013) がまとめているが、1990年代前半からレ

---

\* 研究責任者 Correspondance : 韓昌完 hancw917@gmail.com

レーション(レジャー)活動としてのスノーズレンの研究、1990年代後半から教育活動としてのスノーズレンの研究、2000年代からはセラピーとしてのスノーズレンの研究と、様々な側面を含みながらスノーズレンの研究が発展してきたとしている。日本におけるスノーズレンの研究は、国立情報学研究所 CiNii で検索したところ 47 件の先行研究があった。諸外国と同様に 1990 年代前半からスノーズレン研究が始まっている。1990 年代は、レジャーとしてのスノーズレンに関する取組を報告した研究(鈴木, 1993; 鈴木 1997)が行われ、2000 年代になると、教育としてのスノーズレンの有用性に関する研究(姉崎, 2003; 大崎・大本ら, 2008)や、スノーズレン空間に関する建築計画学的研究(山口・横田ら, 2003; 浅野・長澤ら, 2006)などが行われている。2010 年代は、セラピーとしてのスノーズレンの研究(姉崎, 2011; 小菅, 2012)やスノーズレンが神経活動に与える影響に関する研究(北川・岩永, 2013; 坂野・澤田ら, 2013)などが行われている。このように、国内でも諸外国でもレクレーション、教育、セラピーと様々な領域でスノーズレンが研究されているが、その概念や明確な定義は定まっていない。また、各領域でのスノーズレンの効果に関する研究も始まったばかりといえよう。研究が始まった当初よりスノーズレンの概念や定義に関する研究は行われているものの、その概念は現在も議論されている。

上述したように、スノーズレンを「教育」として位置づけようとする研究は 1990 年代から進められていたものの、「スノーズレン教育」という用語が定義されたのは、姉崎(2012)からである。その研究の中で姉崎(2012)は、スノーズレンは特別支援教育の教育課程の自立活動や特別活動に位置づけることができるとし、スノーズレンの概念を整理・検討した上で、世界的にも提唱されていなかった「スノーズレン教育」という用語の命名・定義を行った。特に肢体不自由特別支援学校に通学している重度・重複児は、教育活動のほとんどが自立活動であるという児童生徒も多いため、スノーズレン教育は、そのような児童生徒にとって有効な指導法であるとされている。先行研究によると、石川県立いしかわ特別支援学校、

徳島県立ひのみね支援学校に感覚学習室やスノーズレン教室という名称でホワイトルームが設置され、スノーズレン教育が取り入れられていることが示されている。しかし、現在、スノーズレン教育の実施状況については全国調査が行われていないため、どれくらいの学校でスノーズレン教育が取り入れられているか、ホワイトルームが設置されているかという実態は明らかではない。また、スノーズレン教育が児童生徒にどのような効果を及ぼすかについても明らかにされておらず、指導法として方法論についても体系化されていない。指導方法論を体系化するためには、より多くの教育実践を整理・分析することが必要である。しかし、学校現場からの実践研究報告はごくわずしかみられないのが現状である(姉崎, 2013)。さらに、学校現場でのスノーズレン教育実践報告をまとめて整理し、分析した研究は今まで報告されていない。このことから、「スノーズレン教育」は極めて新しい領域であることがうかがえる。

そこで、本研究では、沖縄県における特別支援学校の研究集録に記載されているスノーズレン教育の実践報告をスノーズレン教育の定義や教育課程の観点から分析することで、スノーズレン教育の指導法としての体系化に寄与することができるのではないかと考えた。

以上のことから、本研究では、スノーズレン教育の定義、スノーズレン教育の教育課程における位置づけを整理し、沖縄県におけるスノーズレン教育の実践報告を分析することで、スノーズレン教育実践の現状を把握し、課題を明らかにすることを目的とする。また、実践報告分析の結果に基づいて、スノーズレン教育の実践成果と課題を整理し、スノーズレン教育の今後の展望を考察する。

## 2. スノーズレン教育の定義

上述したように、スノーズレンが教育として明確に位置づけられたのは、姉崎(2012)の研究からである。スノーズレンが教育活動として位置づけられた背景には、①日本の特別支援学校においてもスノーズレンが教育実践として導入され始めていること、②国際スノーズレン協会が諸外国の研究成果を踏まえて、スノーズレンの概念は国際

的にレジャー・教育・セラピーの3つの概念を併せ持つとし、教育活動として認められたこと、という2点が挙げられる。

姉崎（2012）はスヌーズレン教育を「スヌーズレン教育とは、教室内を暗幕などでうす暗くし、対象児の好む光や音（音楽）、香りなどの感覚刺激を用いた多重感覚環境を教室内に設定して、その中で感覚刺激を媒介として教師と対象児及び対象児同士が相互に共感し合い、心地よさや幸福感をもたらすことで、対象児のもつ教育的ニーズ（発達課題）のある感覚面や情緒面、運動面、コミュニケーション面などにおける心身の発達を促し支援する教育活動である」と定義した。

### 3. スヌーズレン教育の教育課程における位置づけ

スヌーズレンは、教育的にみると、対象児の視

覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚などの感覚器官に、同時に適度な心地よい刺激を与えることで幸せな思いや楽しい思いを経験させ、対象児と教師がその場で相互に共感し合うことで、対象児の興味・関心の拡大や心理的な安定、能動的な運動・動作、周りの人とのコミュニケーション行動の促進などに寄与することで、対象児の有している諸々の能力を引き出し育て、心身の発達促進につながるものと考えられる（姉崎，2012）。そこで、スヌーズレン教育の指導目標には、①情緒を安定させる・リラックスさせる、②覚醒させる・注意集中力の向上、③運動・動作の向上、④対人関係・コミュニケーション力の向上、⑤その場を楽しむ・快の情動の喚起、の5つがあるとし、それらが特別支援教育課程の自立活動と特別活動・クラブ活動に位置づけられるとした（表1）。

表1 スヌーズレン教育の指導目標と教育課程上の位置づけ

スヌーズレン教育の指導目標	教育課程上の位置づけ
①情緒を安定させる・リラックスさせる	自立活動・内容の区分「2 心理的な安定」 内容の区分「1 健康の保持」
②覚醒させる・注意集中力の向上	自立活動・内容の区分「1 健康の保持」 内容の区分「4 環境の把握」
③運動・動作の向上	自立活動・内容の区分「5 身体の動き」 内容の区分「1 健康の保持」
④対人関係・コミュニケーション力の向上	自立活動・内容の区分「3 人間関係の形成」 内容の区分「6 コミュニケーション」
⑤その場を楽しむ・快の情動の喚起	自立活動・内容の区分「4 環境の把握」 内容の区分「1 健康の保持」 内容の区分「2 心理的な安定」 特別活動・クラブ活動「スヌーズレンクラブ」 学校行事「スヌーズレン遊び」

引用：姉崎（2012）重度・重複障害児の自立活動における「スヌーズレン教育」の意義について

### 4. 沖縄県におけるスヌーズレン教育の実践報告の分析

#### （1）資料抽出方法

2007年～2013年の7年間（特別支援教育への移行後）の沖縄県肢体不自由特別支援学校毎に作成されている研究集録の中から、スヌーズレン教育の定義に該当する実践を行っている資料を抽出した。その結果、3件の資料が該当した。1件の

資料には、複数の実践報告を行っているものがあつたので、スヌーズレン教育の定義に該当する実践報告6件について分析する。

#### （2）分析方法

スヌーズレン教育の定義や教育課程（自立活動）の位置づけに基づいて、スヌーズレン教育の資料（実践報告）を表2に示した6つの観点で分析する。

表2 スヌーズレン教育の資料（実践報告）の分析の観点

分析の観点	分析内容
①児童・生徒の基本属性	a) 学部・学年 b) 授業参加人数 c) 子どもの状態（身体面・心理面・認知面、コミュニケーション面等）
②指導目標	指導目標が以下のどの内容に当てはまるか分析する a) スヌーズレン教育の指導目標 ・情緒を安定させる・リラックスさせる ・覚醒させる・注意集中力の向上 ・運動・動作の向上 ・対人関係・コミュニケーション力の向上 ・その場を楽しむ・快の情動の喚起 b) 自立活動の領域 ・健康の保持 ・心理的な安定 ・人間関係の形成 ・環境の把握 ・身体の動き ・コミュニケーション
③ホワイトルームの設置	ホワイトルームの設置の有無（設置していない場合、どのような環境でスヌーズレン教育を行っているかを分析する）
④多重感覚環境設定	スヌーズレン教育の特徴である多重感覚環境設定が以下のどの環境設定で、どのような教材を使用したか分析する a) 光（視覚） b) 音（聴覚） c) 香り（嗅覚） d) 触覚
⑤指導内容と効果	スヌーズレン教育実践の内容について分析する a) 指導内容 b) 指導効果（子どもの変化） c) 評価方法
⑥指導上の課題	教育現場でスヌーズレン教育を実践する際に指導上の課題がある場合記載する

### (3) 分析結果

資料抽出された3件は、資料Ⅰ～資料Ⅲとした。1件の資料には、複数のスヌーズレン教育の実践報告があり、資料Ⅰ～資料Ⅲで計6事例のスヌーズレン教育実践が報告されていた。

資料Ⅰは、2009年度の沖縄県立泡瀬特別支援学校の実践報告である。この実践では、光刺激に着目した教育実践であり、「スヌーズレン教育」と明記していなかったものの、スヌーズレン教育の定義に該当したため分析対象とした。資料Ⅰでは、3事例の実践が報告されており、全て分析対象とした。資料Ⅱは、2007年度の沖縄県立鏡が

丘特別支援学校の実践報告である。この実践では、感覚統合学習とスヌーズレン教育の3事例が報告されていたが、ここでは、スヌーズレン教育実践の1事例を分析対象とした。資料Ⅲは、2007年度の沖縄県立鏡が丘特別支援学校の実践報告である。この実践では、スヌーズレン教育の3事例が報告されていた。しかし、1事例は広場での実施ということで、スヌーズレン教育の定義（部屋を暗くすること）に当てはまらなかったため除外した。よって資料Ⅲでは、2事例のスヌーズレン教育の実践報告を分析対象とした。分析結果については表3に示す。

表3 沖縄県におけるスヌーズレン教育実践報告の分析結果

分析項目	資料Ⅰ			資料Ⅱ		資料Ⅲ	
	実践報告1	実践報告2	実践報告3	実践報告4		実践報告5	実践報告6
①児童・生徒の基本属性	a) 中学部1～3年 b) 10名(1年生6名、2年生1名、3年生3名) c) 身体面：自発的な意思に基づいて身体を動かし、活動することが困難な生徒が多い。視線が泳ぐ、視線が定まらない、手元を見ていない等の視覚刺激に対する反応の課題がある生徒 認知・コミュニケーション面：笑顔等、快の反応がなかなか得られない			a) 小学部1・2年 b) 11名(1年生5名、2年生6名) c) 身体面：座位保持が難しい、車椅子使用、独歩、手引きでの歩行など様々な程度の児童 認知・コミュニケーション面：日常会話可能、内言語はあるが表出することが困難、快・不快の感情表出することが困難といった様々な程度の児童		a) 高等部1～3年 b) 6名(1年生3名、2年生1名、3年生2名) c) 身体面：吸入や吸引、経管栄養、気管切開等の医療的ケア、体温調節困難、心疾患、てんかん発作等の生徒で、特に健康保持に特別な配慮をする生徒 認知・コミュニケーション面：人や物、外界とのコミュニケーションが困難で、環境の刺激により筋緊張が高まる	
②指導目標	・光の刺激を使い、生徒個々が保有する視覚の活用を促し、外界を探索できる状況をつくることによって、自発的な活動が可能となる a) 「覚醒させる・注意集中力の向上」 b) 「環境の把握」、「身体の動き」			・児童が他者に自らの意志や快・不快の感情を伝える ・スイッチを使いながら身体の不自由さを補う a) 「対人関係・コミュニケーション力の向上」、「運動・動作の向上」、「その場を楽しむ・快の情動の喚起」 b) 「コミュニケーション」、「身体の動き」		・身体の筋緊張を緩和する ・生徒が生き生きと感じる時間を多く持ち心身の安定を図る a) 「情緒を安定させる・リラックスさせる」、「対人関係・コミュニケーション力の向上」、 b) 「心理的安定」、「環境の把握」、「健康の保持」、「コミュニケーション」	
③ホワイトルームの設置	記載なし		視聴覚室をスヌーズレン環境にして授業を実施	ホワイトルームを設置している(スヌーズレンルームという名称)		自立活動室をスヌーズレンの環境にして授業を実施	
④多重感覚環境設定	a) 光るおもちゃ b) クラシック音楽・クリスマスソング c) 記載なし d) 記載なし	a) ミラーボール、ブラックパネルシアター、吊り下げ式イルミネーション b) クラシック音楽・クリスマスソング c) 記載なし d) 記載なし	a) ミラーボール、ブラックパネルシアター、吊り下げ式イルミネーション b) クラシック音楽・クリスマスソング c) 記載なし d) 記載なし	a) 電飾の点灯 b) ピアノの生演奏 c) 記載なし d) スイッチ	a) ブラックシアター、蛍光風船 b) リラクゼーションミュージック c) 記載なし d) ファシリテーションボード	a) 花火映像、ホームシアター b) 花火の音、エイサーの音楽やたいこの音 c) わたあめの匂い d) パーランカー	
⑤指導内容と効果	a) 車椅子に座った状態でも、BGMに合わせて光るおもちゃを点灯させたり無音で点灯させたりして光と音を組み合わせた活動。 b) クスクス笑い出すなど雰囲気を楽しんでいる生徒や、イルミネーションをじっと眺めている生徒、まったく反応を示さない生徒がいた。 c) 担当教師の観察による評価	a) 実践報告1より光刺激を増やし、授業後半にはマットに降り、BGMに合わせて光るおもちゃを点灯させたり無音で点灯させたりして光と音を組み合わせた活動。 b) マットに降りることによって光を見るための姿勢を保持する、顔を動かしつつおもちゃを追視するといった反応が見られた。 c) 担当教師の観察による評価	a) 光る教材を視聴覚室のコーナーにそれぞれ設置し、サーキット上に1つずつ提示し車椅子に座ったままコーナーごとに5分程度光遊びをする活動。 b) おもちゃを追視する表情やイルミネーションの方向に顔を傾ける様子等、様々な反応を見せた。 c) 担当教師の観察による評価	a) 電飾が点滅する様子を見せたり、ピアノの生演奏を聴かせたりして、児童に見る楽しみ、聞く楽しみを味わわせる。電飾教材を自ら掴み、自発的な活動を引き出す。 b) 何度もスイッチを押す様子が見られた。集団活動が苦手な児童もスヌーズレンルームに場所を変えることによって楽しんでいった。 c) 担当教師の観察による評価	a) 単元テーマは「星・七夕」で、ブラックライトで星空が浮かびあがる空間をつくり、蛍光素材の星や風船を使い、幻想的な雰囲気をにつくり、色彩や動きを感じると共にふれあいを楽しみ、星の世界を感じる活動。 b) 蛍光風船は注目しやすく、よく見ていた。暗室で、覚醒状態が低くなる生徒もいた。 c) ビデオ撮影と記録(活動直後)で評価する	a) 単元テーマは「祭り」で、祭りの雰囲気をつくり、リズムに合わせて声を出したり踊ったりする。また、花火映像での色彩や音を楽しんだり特定の匂いや味を楽しんだりする活動。 b) 光の花火を投影し、立ち上がり天井に手を伸ばす生徒がいた。わたあめの匂いには反応が大きいけれど口食のない生徒は反応しない。 c) ビデオ撮影と記録(活動直後)で評価する	
⑥指導上の課題	・記載なし			・予算の確保(スヌーズレンルームの整備等)		・環境づくり等、時間のかかる実践	

#### (4) 考察

沖縄県におけるスノーズレン教育の実践報告を、スノーズレン教育の定義や教育課程（自立活動）の位置づけに基づいて6つの観点から分析してきた。分析結果を基に、ここではスノーズレン教育の実践成果と課題について考察する（表4）。

##### ①スノーズレン教育の実践成果に関する考察

資料Ⅰの実践では、光刺激に着目した教育実践であったものの、スノーズレン教育の定義に該当していたため分析対象にした。この実践では、視覚刺激の反応に課題のある子どもの保有する視覚活用を促し、外界を探索できる状況をつくることによって自発的な活動を可能にするという目的の実践であった。さまざまな光刺激（光のおもちゃ、ミラーボール、ブラックパネルシアター、吊り下げ式イルミネーション等）を使用することによって生徒の追視する様子が見られたと報告されていた。このことから、スノーズレン教育は、注意力の向上（スノーズレン教育指導目標「注意集中力の向上」）や保有する感覚の活用促進（自立活動「環境の把握」）につながると考えられる。また、実践報告3の実践内容では、光刺激ごとのコーナーをそれぞれ設置したとし、実践報告1、2より追視や顔の傾けなどが見られたと報告されていた。注意集中力の向上や感覚の活用促進をより効果的に行うためには、一度に多くの光刺激を与えるより、より注視しやすいよう少ない刺激を何回かに分けて与えることが良いのではないかと考えられる。

資料Ⅱの実践では、感情表出に課題のある子どもの意思や快・不快の感情を伝えることを目的とした実践であった。また、児童生徒の自発的な行動を促すことを目的とした実践であった。その結果、子どもの変化として集団活動が苦手な児童もスノーズレンルームに場所を変えることによって楽しんでいと報告がされていたように、遊びや集団活動に参加できる（スノーズレン教育の指導目標「コミュニケーション力の向上」自立活動「人間関係の形成」「コミュニケーション」）、楽しむことで情緒が安定する（スノーズレン教育の指導目標「その場を楽しむ」自立活動「心理的安定」）ことにつながると考えられる。また、表3の分

析結果には示さなかったが、1年間の活動を振り返って、スノーズレンルームを継続して使用することで、子どもたちが「お楽しみ」の時間を心待ちにする様子がみられるようになり、意欲的に授業に参加するようになったと示している。このことから、継続したスノーズレン教育を実施することで、よりスノーズレン教育の成果が得られるのではないかと考えられる。

資料Ⅲの実践は、環境の刺激によって筋緊張が高まる生徒や医療的ケアが必要な子ども等、特に健康の保持に課題のある子どもを対象とし、身体の筋緊張の緩和と、心身の安定を目的とした実践であった。この実践では、「星・七夕」や「祭り」といった活動毎のテーマ設定をし、さまざまな色彩や音楽を楽しむ生徒の様子が報告されていた。表3の分析結果には示さなかったが、この実践では、1年間の活動を振り返って、回数を重ねるごとに生徒がリラックスしてさまざまな刺激を受容する様子が見られたと報告されていた。これまで刺激に対して緊張していた生徒も、スノーズレン教育では刺激を受容しリラックスしていた様子うかがえる。このことから、スノーズレン教育は健康状態の維持・改善（自立活動「健康の保持」）や、情緒の安定（スノーズレン教育の指導目標「情緒を安定させる・リラックスさせる」、自立活動「心理的安定」）につながると考えられる。また、資料Ⅱと同様、1年間のスノーズレン教育によって得られた成果より、繰り返し行うスノーズレン教育は児童生徒の感情表出や刺激受容を促す効果があると考えられる。実践報告6で、経口食の経験のない生徒は、わたあめの匂いに反応しなかったとの報告があった。このことから食べ物に関する嗅覚や味覚については、児童生徒の経験が関与することが考えられる。

##### ②スノーズレン教育の課題に関する考察

実践報告1～6において、ホワイトルームの設置をしているのは実践報告4だけであり、その他は教室（自立活動室や視聴覚室）をスノーズレン空間として実践していた。これは、表3に示したスノーズレン教育の課題でもあるように、予算の確保の困難さが考えられる。大崎・石川（2007）の報告の中でも、ホワイトルームを見学した人か

ら「スヌーズレンを設置したいが、予算的に厳しい」という声があったと報告されている。また、予算だけではなく教室の確保も課題である。実践報告5、6でもあるように、スヌーズレン環境をつくるのは時間を要する作業であり、ホワイトルームを常時設置することでその課題を解決できると考えられる。しかし、特別支援教育に移行されてから、特別支援学校に通う児童生徒が急増し、教室不足が深刻化している（教育新聞、2013）。このような現状の中で、ホワイトルームの設置、スヌーズレン環境の整備が課題である。

また、実践報告1～6における多重感覚環境設定を分析した結果、嗅覚刺激を使用しているものは実践報告6のみであり、触覚刺激を使用しているものは、実践報告5、6であった。大崎・石川（2007）は国立特別支援教育総合研究所のスヌーズレンルームの紹介を行い、その中で、嗅覚刺激としてアロマストリームの使用、触覚刺激としてウォーターベッド（ミュージックバイブレーション付き）の使用を紹介している。スヌーズレンにおける環境設定をより充実させるために、多様な感覚刺激を活用する教材研究を推進することも必要であろう。

実践報告1～6における評価方法を分析した結果、実践報告1～4は、教師の観察による評価であり、実践報告5、6はビデオ撮影と記録（活動直後）による評価であった。しかし、いずれも評価基準や評価尺度等を使用したことは示されていなかった。このことから、スヌーズレン教育の評価基準や評価方法が確立されていないことが示唆される。スヌーズレン教育に限らず、現在特別支援教育の領域では、妥当性の検証を行い、科学的に開発された教育成果評価尺度はほとんど見当たらない現状である（韓・小原ら、2014）。今後は、スヌーズレン教育による教育成果（効果）の評価基準・評価方法を確立し、教育成果の評価尺度を活用していくことが課題である。

実践報告1～6における評価方法を分析した結果、実践報告1～4は、教師の観察による評価であり、実践報告5、6はビデオ撮影と記録（活動直後）による評価であった。しかし、いずれも評価基準や評価尺度等を使用したことは示されていなかった。このことから、スヌーズレン教育の評価基準や評価方法が確立されていないことが示唆される。スヌーズレン教育に限らず、現在特別支援教育の領域では、妥当性の検証を行い、科学的に開発された教育成果評価尺度はほとんど見当たらない現状である（韓・小原ら、2014）。今後は、スヌーズレン教育による教育成果（効果）の評価基準・評価方法を確立し、教育成果の評価尺度を活用していくことが課題である。

表4 沖縄県の実践報告分析によるスヌーズレン教育の実践成果と課題

スヌーズレン教育の実践成果	スヌーズレン教育の課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 光刺激を使用することで子どもの追視がみられ、注意集中力向上、保有する感覚の活用促進につながる</li> <li>・ 刺激に緊張する子どもも、スヌーズレン教育の刺激は受容し、リラックスする様子を見せた</li> <li>・ 継続して（繰り返し）スヌーズレン教育を行うことにより、児童生徒の感情表出（リラックスや快の情動喚起）が見られる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スヌーズレン環境整備のための教材開発時間の確保</li> <li>・ ホワイトルーム（スヌーズレンルーム）設置のための予算確保・教室確保</li> <li>・ 様々な感覚刺激を用いた教材研究の推進</li> <li>・ 評価基準・評価方法の確立（教育成果評価尺度の活用）</li> </ul>

## 5. おわりに（今後の展望）

以上、スヌーズレン教育の定義や教育課程上の位置づけを整理した上で、沖縄県の特別支援学校で行われている教育実践報告をそれらの観点から分析し、スヌーズレン教育の実践成果と課題を明らかにした。ここでは、スヌーズレン教育の課題をまとめ、今後の展望について考察していきたい。

沖縄県の特別支援学校で行われているスヌーズレン教育実践を分析した結果、①スヌーズレン環境整備のための教材開発時間の確保、②スヌーズ

レンルーム設置のための予算および教室確保、③様々な感覚刺激を用いた教材研究の推進、④評価基準・評価方法の確立（教育成果評価尺度の活用）、が課題として挙げられた。教材開発時間の確保については、スヌーズレンルームが常設されることで、解決できると考えられるが、現在はスヌーズレンルームの設置も予算不足や教室数不足で困難である。今後、これを解決するためには、スヌーズレン教育の教育効果を明らかにする研究を推進することが必要であるといえよう。近年では、スヌーズレンが自律神経の機能や活動に与える影響



に関する研究（坂野・澤田ら，2013；北川・岩永，2013）やスヌーズレンによって脳の快適さの知覚に関する研究（野村，2011）など、医学的な観点からもスヌーズレンの効果を明らかにする研究が進められている。これらの研究と並行してスヌーズレンの教育的な効果を明らかにすることが必要であり、そのためにも、スヌーズレン教育の教育成果（効果）を測る評価基準・評価方法の確立は必須である。

特別支援教育では障害の重度・重複化が進む現在、スヌーズレン教育はそのような児童生徒にとって今後、必要となってくる指導法であると考えられる。そのため、スヌーズレン教育によってどのような効果があるかを吟味し、指導法として体系化されることが急がれる。そのためにも、今後さらに実践報告を収集し、整理・分析を行うことが必要となるだろう。

## 文献

1. 姉崎弘（2003）重症心身障害児教育におけるスヌーズレンの有効性について - 肢体不自由養護学校の自立活動の指導に適用して - . 日重障誌, 28(1), 93-98.
2. 姉崎弘（2011）スヌーズレンの母子療育場面における重症幼児の行動分析 - VTR 分析を用いて - . 三重大学教育学部研究紀要, 62, 169-176.
3. 姉崎弘（2012）重度・重複障害児の自立活動における「スヌーズレン教育」の意義について . 三重大学教育学部紀要, 63, 297-314.
4. 姉崎弘（2013）わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開 . 特殊教育学研究, 51(4), 369-379.
5. 浅野耕二・長澤夏子・横田善夫・渡辺仁史（2006）スヌーズレンに基づく空間刺激によるリラククス効果に関する研究（障害者の行動, 建築計画 I）. 学術講演梗概集, 1049-1050.
6. 北川かほる・岩永誠（2013）スヌーズレンが重症心身障害者の自律神経機能に及ぼす影響 . 日本医学看護学教育会誌, 22, 12-18.
7. 小菅秀泰（2012）スヌーズレン療法：スヌーズレン療法とは 実践及びその効果（現場向け特集 認知症に対する各種療法・ケア最前線：認知症高齢者に対する芳香療法）. 認知症ケア最前線, 32, 27-33.
8. 教育新聞（2013）特別支援学校の教室不足 設置基準作成で早急に解消を, 2013年7月25日号, <http://www.kyobun.co.jp/opinion/20130725.html>.
9. 韓昌完・小原愛子・上月正博（2014）特別支援教育成果評価尺度（SNEAT）の開発 . Asian Journal of Human Services, 7, 60-71.
10. 野村寿子（2011）スヌーズレン - 脳が知覚する快適さの仕組み（作業療法と脳科学） - （身体感覚, ボディイメージ, ダンスセラピー）. 作業療法ジャーナル, 45(7), 797-803.
11. 沖縄県立泡瀬特別支援学校（2009）平成 21 年度研究紀要第 17 集 .
12. 沖縄県立鏡が丘養護学校（2007）平成 19 年度研究紀要第 14 号 .
13. 坂野純子・澤田陽一・新山順子（2013）スヌーズレン空間が発達障害児の自律神経活動に与える効果の予備的検討 . インターナショナル nursing care research, 12(3), 39-44.
14. 鈴木清子（1993）"スヌーズレン"- 重度知的障害を持つ人々の活動 -. 作業療法ジャーナル, 27(12), 1256-1259.
15. 鈴木清子（1997）最重度の知的障害を持つ人々への取り組み：ヨーロッパでのスヌーズレンの紹介を通して（自主シンポジウム 16, 日本特殊教育学会第 34 回大会シンポジウム報告, 実践研究特集号）. 特殊教育学研究, 34(5), 159-161.
16. 山口有次・横田善夫・渡辺仁史（2003）スヌーズレン空間に関する建築計画学的研究（障害者施設, 建築計画 I）. 学術講演梗概集, 217-218.
17. 横川正枝・大本好子・山根幸子・西村典子・君野淳子・古瀬なお子（2008）スヌーズレン療育を実施して . 鳥取臨床科学研究会誌, 1(1), 91-94.